



重修真書太閤記
四編八

459
38



へ!3 特
門 野 百
號 459
卷 30

消
福
永

重修眞書太閤記四篇卷之廿二

梶川弥三郎將軍退去と勸奉る事

并將軍家槇島退去の事

同
會
攻
印

織田家の軍勢五萬餘騎宇治五箇の庄小陣をとらして
旗旗天と覆ひ兎の躍ハ星乃どくく猛威あさうを拂ひ
かば槇島の城只今乗破らんとつべく見へたりけり
比元龜四年七月十八日早天又宇治の川上又押寄見玉
あし折しも日頃の雨又水増て漲り流る彼大河いづ
く淺瀬と見もろろ先陣を心あけり人々も馬と
扣えてたぐどめり信長と水を見あみて昔も今も同

太閤記四篇卷之廿二

ト川水よ然る小足利又太郎忠綱佐々木四郎高綱は先陣して名を末代に残したり忠綱高綱とてを同人翼ありとも聞ざりき此水何れものこゝかあゝん起墨股の川小も過ト信長も一と見よとまきぞ我を手木小渡を若者共と罵りあへば誰うの君小劣るべき吉例ふまは平等院越り渡るべしと真先は稲葉伊豫入道一鉄同右京進同彦三郎父子三人馬を打入白波蹴立くおらぶのこゝ水は齋藤新五郎氏家左京亮安藤伊賀守不破河内守同彦三飯沼勘平丸毛兵庫頭同三郎兵衛市橋九郎左衛門尉等いづれも負トと續いたり流布木梶川弥三郎正教先陣の由と載まども梶川

がと既小前よりいづれも合戦に先達く槇島小入とて依りてに除く但梶川弥三郎正教は平左衛門正繼の次男佐久間信盛の寄騎槇の島攻のとき生食といふ馬を賜りて宇治川を渡るといふり誤く先陣をいといふるべし
稲葉齋藤むりの岸へあびるやりや平等院の門前乃在家に火をうけ焼立たり信長の本陣おては武井夕庵筆を取く諸手の先後と軍の次第と記さんためは扣えたり儲とて五箇の庄乃邊より打渡を輩は誰とぞ木下藤吉郎佐久間右衛門尉柴田修理進池田勝三郎丹羽五郎左衛門尉蜂谷兵庫頭明智十兵衛尉細川兵部大輔同与市

郎荒木攝津守永井筑前守蒲生右兵衛大夫同忠三郎
後藤喜三郎近藤山城守永田刑部山岡美作守同孫太
郎同對馬守多賀勝左衛門山崎弥一郎等ひこくと打
入く押さへ將軍の御勢多く、槓の島小楯籠りて
將軍を守護し、その餘、宇治川の岸、小支えり、おて
ハ寄手の川と半、さらん時、鉄炮を打り、けり、射んと
構へつとも、今朝、これ、野、小も山、も立、ひ、旗、乃、數
馬印、ふん、どの、色、と、思、ひ、く、に、さ、一、連、り、小、驚、馬、く、は、ま
始、り、大、軍、あ、る、べ、い、と、推、量、り、つ、ま、ど、も、か、く、や、う、と、は、
お、そ、ひ、寄、さ、て、し、ゆ、急、ま、ば、い、あ、さ、れ、く、見、る、つ、ら、に
織田の軍勢は、や、川、を、渡、り、て、ほ、ま、あ、る、小、ら、う、一、支、え、も、支、

え、び、船、小、取、乘、槓、島、へ、引、入、り、て、織田家の諸勢、ハ、河、岸、に
一、軍、あ、り、ん、と、思、ひ、し、に、御、所、方、は、や、く、と、引、上、て、城、中、へ
入、り、ふ、ら、う、真、に、中、島、と、西、へ、足、輕、と、備、え、鉄、炮、五、六、百、挺
あ、か、し、ま、し、て、打、掛、たり、城、中、ら、う、を、松、井、山、城、守、康、之、に、
か、し、く、嫡、子、弥、四、郎、康、秀、と、名、乗、り、討、て、出、ま、げ、稻、葉、伊、
豫、入、道、父、子、三、人、一、千、餘、騎、ま、て、駈、向、ひ、松、井、父、子、と、真、中、に、
追、取、ら、め、く、戦、み、つ、と、松、井、ハ、聞、あ、る、勇、士、と、い、ひ、し、の、軍、小
戦、死、し、く、武、恩、と、報、し、名、と、後、世、に、揚、べ、い、と、お、そ、ひ、設、
け、し、く、さ、か、さ、べ、切、し、も、射、し、も、こ、と、く、さ、び、獅子、奮、迅、の、威、
と、あ、る、ひ、父、子、兩、人、打、く、合、さ、へ、左、右、ま、り、れ、ち、う、こ、一、處、
小、打、寄、く、面、も、あ、ら、び、戦、へ、稻、葉、り、千、餘、騎、散、り、ま、切、立

らほとぞ小危よく見へしつと二陣小ほぎきー木下
か勢あまほまーと責たりーかばほしそに猛き松
井父子あふ無慙や乱軍のつらふ討まけりあそれ
此時城中より松井父子よかと合まらるものあはは織
田方大子難義とてつらふ誰ありて援まらぬもあ
あそら勇士と見殺ああしつとそとてしほ松井父
子討まけり後へ御所方一人も討く出るものあはは惣
軍一同よそや乗入んとひのめきしつと木下藤吉郎を
廻り殿の仰そ備まらめて遠巻してあふ左右あはく
御城へのさへつらふ弓鉄炮をたやましく打あそあらぞ
呼らうく味方を制しつらふいつともく軍とやめ

て城中乃容子を伺あそそ居たりしる植島乃城中よ
てハハぬての荒増相違しと御味方の大名一人も馳来
らひ結句落そそのハ多のりつらふ將軍家もいと
興さめておそしあしつらふ近習の面々御前小伺公
敵大軍を以て幾重ともあく取巻てゆへい遁ま出べき
道もあは味方の氣りき心退屈し一戦ともあそをま
けしきかー何とありせあふべき御行末ぞやと心細
げよのり合將軍御自害あはら御供とまきと息を
め氣とほして扣え居さうける処へ梶川弥三郎正教衆上
御吉瑞のりつと中上べくゆとそ左右あはく御前伺公を
んと出けると近習者あしつとめいつかはは御前とそ

憚り無礼ありといふと將軍聞食何事ぞうろろ
 き思案ありばや上ると御説ありしかば弥三郎正教じ
 こちうて言上りける様逆徒雲霞のごとく御城の四面に
 備をのめその數五六萬もつけよ鳥あつて何處よ
 りの漏れき然らば逆徒等よく恐謹く御城を向
 ひ銃炮とほりあらしども玉とまめいふく矢と射い
 へとも銃あけゆとよく三好松永の先縦又懲りと見
 えての然らば當城を出御せよとよく間備と引く路
 を明しと仰遣はされゆり異儀と申上るに及び定
 めく御説又從ひ申すくは上り御自害めんども御意之
 とも事の心も知りぬとぬ公達御臺所局たちとけりぬ

まいらせ多くの御方の御先途かつ隨ひ奉り兵士
 等へ御感の恩賞はかく共助命ありば莫大の御仁惠か
 るべくゆと言上りけるは將軍大きに悦びをまひ其方
 乃中宛一段尤も聞えいともそのことを信長は誰
 とよく傳へしむべきぞと仰られしはよく弥三郎謹で
 言上りけるは某事親族多く信長の旗本は罷在の間を
 さらまたたけり申通しはるること心安くぞんどのさりか
 りら別の御使とをくらをふゆをばして御説乃趣を
 正しく信長は申すことありひゆまどくいと申上りけるは
 將軍此義は同じあり近習者一人呼出り弥三郎と共に
 織田の陣中へ参向して申す様御出城あるべき間路

を開き可申段を申せしと仰含められしに、彌三郎
大手の櫓小はしり登り將軍より御使を以て仰らる
御旨あり志をわく合戦を止めて路次をたしめしと呼
ぶつしげきへ織田方の陣と楯と伏て鳴と一づむるとき
木戸を開く梶川彌三郎將軍の御使を伴ふて信長の
本陣に至る信長とて、小使者をめし出さば何ら
故小立られし御使と問ふに、使者將軍御説乃旨
と言上し信長具に聞るに御説の趣承るに訖たし
此迄信長が申上る条目更に御用ひふくあつたし、信長
誅きりふき、昔諸國乃大名等へ御教書と下されゆふ
先達て上洛仕り信長が不義何事小ての哉と上意と

伺ひしへ、御誤りの段仰下されしに、信長疎意存し
奉りしゆ由申上りて下向仕りし然るに幾程も經不申
小如是の御結構、偏小争乱を好ませぬ御義と奉
存し天下に静謐とこそ祈りしゆ、何条争乱とてみま
さふふべき因て止しとを得と侍とも召具て参向仕
ゆども御退去ありしとの御説、小ゆへともかくも御
説又從ひ申さしあて罷歸りし旨言上仕りしとて
將軍の使者を返り奉りし、槇の島にて、信長何と
申つらして使者の口状を待らば、あふ處へしり歸り思
召のまに御立退ありしを、わくは御路次の義とてし
も妨ありましき由と言上仕りしとの請文を奉りしと

將軍しやうぐんの外のわりの悦喜えつぎすしゆ御退去ごたいその御支度ごしどあり
信長のぶながの方かたみて、諸將しよしやうをのく圍くわいととき持場もちばをらげの
仕寄しよせと取壞とくわいらげと榎島えのしまあても心安こころやすくおがしめされ
公達こうたつ御臺所局達ごたいしよきよくたつと供ともしめみて普賢寺ふけんじへ入御いりごすしゆ
ぬ

普賢寺ふけんじハ山城綴喜郡やましろづいきぐんあり榎島えのしまより小倉長池こくらながいけを過

草内くさうちの渡わた一いつ木津川きづがわと越こえば普賢寺郷ふけんじごうありこれより

山一やまいつの越こえば河州交野郡かうしゆかうのぐん尊延寺村そんえんじむらあり

信長のぶながより木下藤吉郎きのしたとうきちらうとて路次ろじの雜事ざつじを奉行ふぎやうさせし

ましハ將軍家草鞋しやうぐんけさうぢの御煩ごわづらひひふくそれより河州若

江えの三好左京大夫さんこうさけいだいだいふ義繼ぎけいの方かたへ送り奉まかせしゆて仰出あやしめさせ

う、秀吉承ひでよしうけりて仰あやしめのまに供奉くわんぷしたりけり嗚呼あゝの日
如何いかなる日ひぞや足利將軍家あしひしやうぐんけ十四代じゆしだいの柳營やなぎえい無主むしゆの殿舎てんしや
鷓鴣せいごの棲すまとありけり

信長江州所働の事

并木下細川淀の城責の事

將軍榎島しやうぐんえのしまを退去たいそありしハ信長のぶながより細川六郎こがわむつらうを榎島
の城主じやうしゆ小あさまをのりたることを奉行ふぎやうせめられそ
れより爰こゝハこの城じやうに楯籠たてかごをたる將軍方しやうぐんかた乃者ものとも共
を責せらるべしとて手分てわきありしハ敵山てきさんの麓ふもと一
乘寺りやくじといふ処ところの要害うやげに渡邊宮内儀わたなべみやうないぎ貝新右衛門かいしんゑもんが籠居かごゐ
けるを責落せあふさるべしとて柴田佐久間しばたさくまを差向さしむからしめし

渡邊磯貝のふふまじとして降参一要害とて以篠原
小ハ山本對馬守といふ者籠てりるを明智十兵衛尉光
秀お寄る責落一城を請取廿日信長歸京ありて
洛中静謐のとめ村井民部と差置と所司代とふささ
長門守と改めらとて梶川弥三郎正教ハとぐれたる
勲功をか一つとと領知とふび生喰増るといふ名馬
と賜りりり抑木下の勲勞多きうらふ今度將軍家
と落一奉り一と第一の忠功とやべ一その故ハ
將軍家御自害ありといふ小宣ふとも信長下りて上
と犯一臣その君と弑き一惡名とつけ春秋乃譏を免
まふふまじきと秀吉の實意よりて信長惡逆の名と

うけむりば不思議ありける神智うかと今こそ人々感ト
けと廿六日信長京都と立ちりて坂本より江州高島郡
へ働き木戸田中の兩城を責めふは城主いづとも降参一
城とあり渡一りては城とバ明智十兵衛尉小賜ばりけ
て山城國淀の城ハ三好三人衆の内岩成主税助祐道公方
家又組一召小從ふて御味方とあり表向ハ信長へ降参の
り一ふと此春より籠て居けるが強ち又公方家を助
け奉る小もあらば諸軍の威をりり信長を滅さんと
おとすひ一ハ岩成淀の城を持堅め公方家より加勢を
乞請番頭大炊頭諺方飛驒守と共に二千余人より籠城
一りては信長より木下藤吉郎細川兵部大輔兩人を討手

の大將として差向らる岩成元より名譽乃勇士ふまは少
しも恐むむ手配定め相待ける木下細川の手の者無
二無三は責入けまども主税助が防戦をげく寄手乃
兵士を蒙るもの多かりにうり木下味方を制し岩
成は等閑の敵小あはび楚忽の軍してあやまらむ
奇謀を設け責取べると暫く虎口を引退き備を
立て軍議をかゝりける秀吉きつと案ト出きしことあ
つとく細川小向ひ岩成主税は三好三人衆の中ふて隨一の
勇士といひ軍慮ふたけしそのかまは容易く責取ん
ことかゝるべし加勢小籠ア大炊助飛驒守は必死の
覺悟あるべし能く利解を述べらばよとや小降参は

べりの主税助をのり公方家乃御頼を幸小自己の欲
と遂んとおらふべしども將軍御退去乃後籠城其
詮あきことの誰も知る道理あり加勢の二人は公方家
より遣をゆきしそのふまは槇島御退去より普賢
寺入御令不と河内ふやゆを由と告たらんは彼等
いたらやうら岩成は加勢その所はあはびをやく將軍乃
御許へ参上して仰小従ふべしとおをふあらん件兩人
出城あらは岩成は一人何やうの事かあはく岩成は從
ふそのとでも多くいふ比の集り勢あり強て主税助
と同一く死ん同一く生んとおのふき小あはらば先
番頭諺方の兩人を降よとく槇島御退出の始末く

いづく書認め今いそや將軍天下の大小事とよぶ信
長小任きりれ御心安く世と過させよんとて綴喜の普
賢寺へ御退きありとて河州より海とあり御
追將軍の御ため小籠城との本意からん小將軍とて
小槇島とよてさせあり將軍とて城を御とこりあり
く信長が心のまゝと仰出させつるは面ぐ枝葉の城
小ありとて心死と成りありとあるはけし但將
軍の御とめと好くゆる亂世のとあるはその城は居
く運と天は任きてとて御心からば將軍の御心もた
ぐとせありあり心のまゝと御許ありと上といひ世の
乱と好ませあり人々とそのまに捨とべき小ありび大

軍と以く只一時は責破りしと中送りしと大炊
頭も飛驒守も將軍の仰のおまじとて當城へ加勢
とて籠りしと何に岩成一人を助くべき槇島の
つとく小とてこそ當城と持ちとえんととて小槇島
の左様ありたらん小當城いつまも誰爲小ありは
つべき成甲斐ふきあひの城はあり無益の戦きんこと愚
あり小ありのざやされども岩成は城の本入りこのこと
談よて見やと兩人相談しけりやく岩成は古兵之
これと欺きて城を出るとに如どとて寄手乃兵士等が城
方のその共勢ありとて置の終小降参せんとい
づとも悔りて無用心ありと告るものありしとを

大日本書紀卷之二十一

一とさそやきけさへ岩成ともあつてあくき寄手のあ
ろ哉然ハ切く出油断きく木下細川陣をうけ破りあ
るゝの退屈をさうしんと三人とも小約束しける小大炊
頭飛驒守何様寄手の度々の軍小打くらしく心おごうし
て我も並にさうさうやうて降を乞あんとあかどり
おまつるあつてさやふあかどりさうてハ降参して太
刀刀さうさうれ耻辱おあせんも心うのたう又將軍より
預り奉て一城をさうさうさう小退退んも士の道あらび
さらハ武士の道を守り尋常に打て出居眠一居たる
寄手の面を蹴らう一我も太刀の刃金とあらハとを
けさうと辞をさうさう同心しけるにさう岩成大小悦ハ然ら

ハ早このとを謀るてさうて手さうさうさうが三人同
トく打出んもあまうに思慮か一二人打出一人は城を
成り一人引返して入替るてさうさうさう然岩成と
番頭と兩人千餘騎あて打出まの誅方ハ五百餘騎あて城
小せまる寄手のあて番頭誅方と打合さうさうあて
ハあり岩成一人を遠くとさうさう出さんとさう謀れば
さうと寄手ハひびひかく逃たりさう岩成おさうさ
きさう小おさうさう何處さうさう追うけさう寄手ら
あてに引らさう細川勢とさうさうあさうさう戦ふさう
岩成いさう手さうさう責付て敵も敵さうさう細川
我等をあかどりさうの悪さうさう手柄のさうさう知を

をやとて大手を廣げていづく迄もと追掛たり細川と
 のかへドとして引退き終よる城とを分きて程遠くあるを
 も知とて戦ふれども番頭が五百餘人のこと引下りやぐて城へ
 引入て城戸をとり評方と一所の寄手へ使として岩成一入城
 ふう出してゆべやうて引返しはん時我々兩人城より嚴鋪
 防ぎひて入り寄手後より急よ責させまつ岩成を打と
 らんと手の内よめてゆといませいの木下心得いゝも計じ
 もの哉夫の相違かくの城と請取てのら本領安堵の事を岐
 阜へ慥よ中續面々の家名相續ありきこと慥ふ答て使とを
 流布本此段大小相違ありて弁とらに及び今淀の土
 人の口碑ふらうてこれを改む

重修真書太閤記四編卷之七二終

重修真書太閤記四編卷之七三

加藤清正岩成主税助を虜る事

并秀吉勸誅祐道事

木下藤吉郎秀吉の謀小因て淀城中小籠る所の兵士等心
 小ありしに真島の城落たりん小此城を堅固に誰
 が爲小成るべきと番頭大炊頭評方飛驒守おとひく
 早く降参して本領を安堵一家名と相續をりやと心
 の中小計りしる処へ木下の使者来りて將軍御退城のら
 此城小於て合戦更小その詮かき旨を示ししるふらう
 いやく降参の手段を定めしる小岩成主税助一人合戦と

専として寄手を追拂ひ城を持ちあへんことを議しける
 小より番頭誅訪の兩人意を決し寄手と謀り岩成と
 誘ひ出しける寄手と討負しを實と思ひ岩成
 深く追うけり城を遠く離れしる番頭は引
 返し城小入城戸を固め誅訪と一處小これを守り寄手
 八岩成とあしりて十五六町も走つて踏止りまゝに戦
 みて逃げり小より岩成勝小のり遂小廿余町を隔てけ
 る比細川が勢三方四方より起り立岩成を中取籠もら
 ざりと責付たり岩成おそひも寄ぬ伏勢小驚きま
 を専途と戦ひふぐり木下り細川小逢て討死をまよと
 自鎧と取り真先小進く右小當り左小突今日を限りと

振舞けしハ相従ふ侍ども是又勵さし岩成うさぎと
 馬乃前又立て手痛く軍しけれハ細川が勢満くと小持あ
 まし次第く跡をさし淀近く引返しけしは岩成
 も戦勞さし城入る休息し又こを戦つめと思ひ
 城門口小向ハ門の上ありける櫓より誅訪飛驒守大音
 あげし將軍とて小槇の島の城をよてさせあふあり
 織田殿の御計いとく別小城主を置あふ由たし小
 承よりいさよれハ淀乃城誰人の爲に守りしき因て當
 城と木下藤吉郎の手へ御渡しやべく此昔よりく
 御披露頼入と呼りけり小より岩成まこと小肝をつぎ
 備い誅訪めり心變り悪さも悪し一責をめて責落しく

れんぶるものぞと怒りしは番頭大炊頭堀の上小立あ
らひは誣訪殿のいそごとく此城もと槇の島乃強
小築うれ一城あるその根本の槇島將軍とく小退
去りしは枝葉の淀城を守りてもその甲斐ありし
岩成を立出して後事の子細を言上仕りしは速
御披露あるく頼存ぶるといふより岩成齒齧と
か一口惜や兩人ともに吾を欺き寄手は一味一將軍乃
御敵とふるまふその仇はかゝりしと城小向して鉄炮
を打せし一揉みと攻めくまは細川勢潮の如く岩
成を撃取んと取れこむ處へ木下の勢の中より加藤虎
之助蜂須賀又十郎五百余騎小て岩成が後へ廻る岩成敵を

前後小引受千余騎ありつる武者二百余騎ハ討せしハ
百余騎又成小々城ハ兩人小追出させ敵ハ前後小競ひ
ゆる忙然とく思案小迷ひ何處へう落て身を全く
一又もや軍を起し今日の鬱憤をとうりめんものを
と思ひ一方打破り落行處へ三十余人の足輕どもひら
と寄来り岩成が馬の前後小をよて敵を防く岩成不
思議小おどひ何者ぞと尋せしは四國より軍見
物小登りしはのりて三好殿の御袖印と見せ助け奉
るべく馳参りしは岩成大悦ひ然ハ一より阿州へ落
て又もや便宜を伺ひ切く上るべく思ふあり面々防
戦して給とうらくつろひて打りし處へ鉄炮一響くや

六月廿日編年三十三

三

否木下り勢の中より加藤虎之助三百余騎小て追うけ
 たりその間弓杖五六段とありしころ只今四國より
 勢といひつる身の岩成を引包んで切てゆる祐道より
 ひ仰天一汝等ハ四國の勢といひしにあらば何れ
 ハ左様の振舞よりぞと怒りし間もふく加藤虎
 之助馬をうけ寄いり岩成たしか又きけ公方家乃御
 味方と思へ公方の御諒小從びらよ今度乃軍を
 幸小先亡の耻と雪めんとの結構と知しよと左やりの
 浅くしき術を以て我等と謀えんと巧くしよと愚
 り早く我手小のきと聲うけり岩成大きき怒り
 番頭諏訪うとき臆病者と同様よふ思ひよとそ三好

一類の中小ても世小知しよ岩成あり物具の札をもち
 め一太刀の鎧をも試んとおそつらよと組んとけり
 して回る處へ加藤が郎等木村又藏はめハ四國のものと
 偽りて岩成が馬の左右小ありけるが走寄岩成が馬の尾
 筒を握て引よと片手小て馬の足を引つよとさあいや
 といつて刎倒せハ岩成も馬小敷よとて轉側けり虎之助
 透さび馬より飛ぶおろ岩成又引組し主税助も名
 譽の大力ありしハとも今朝より數刻の合戦小力衰へ
 氣疲よと小倒し一時左りの膝を折しき頻りよ
 とびまよハおぬよとよきかもふく虎之助小生よと
 よと大將よとよかくのよとよハ士卒ハいよ

恐怖して散乱とるを木下細川の両勢爰も追詰かき
小切伏首數三百あり討取たり虎之助の三好家隨一の
岩成と生捕大小悦び木下の陣小連行事の始末を演説
しつゝのハ秀吉聞てその功を賞し岩成を陣中に止め置
そのち惣勢を率し淀の城へ押寄しかハ評訪飛驒守
城戸と開き寄手と迎え入りしハ木下細川城中小入く
役所くと請取降参のものを召具し討取し首共を取
持を江州高島の陣小至しかハ信長とあつら岩成を引
出し其方武邊を以て畿内小名を流したる勇士あるハ
いくふも木下小責破られ加藤虎之助ととき小童小と
やとく生捕ししハいくふぞやとあつらしハ主税助少し

も臆とる色なく打笑て鎮西八郎為朝惡源太義平ハ世に
聞えたる名將勇士かまとも運盡ぬとハ敵の爲又生捕
きたり戰場小く勇士の勝敗めつらしハ數刻の軍
小人馬とも小疲且不意小投倒さし上あれはいよ
たりと但臆し人小誹謗せられしハ表裏乃行ひ
言語定りあつさる人もあつそれら小らりてハ祐道生
捕ししも耻あるとびと答へ奉りしかハ信長お返し
其方一旦降参しとくちとあつしハ我小敵對とるハいかに
胸中ぞやとあつしハ岩成承つる心中小おろし様い
ふもしと命を助るを再び本意を達さつと了簡し仰
のごとく最初敵對し奉りしときとや叶ひつた

由と納得仕りゆへ降参してゆひし公方家より再
 仰下さしゆふり後難いともかくも眼前小御請不
 して一命も及ぶべくの間その場の罪過とのごらん
 為小御教書の旨小従ひ淀の城を守りての弓箭取身
 のこと小てゆへ御勢を引受まづい合戦も仕りし是ま
 武士の習ひふてまこと心よゆりゆともその場小臨
 止しとを得むゆやく首を召れゆつ辱旨詞と
 くやげと信長元より岩成をさき侍と思召さま
 と故萬卒得易く一將得がと云本文もあり其
 方誠よ我小歸伏して忠勤をまじむべく我まご汝乃
 罪科を問ふ及ぶと仰られしにまう岩成謹く承ま

再犯の罪科を御免あましく某あんぞ誠忠を盡さるるを
 きや鷹馬と侍ハ遣手小らるるその小とやげは
 信長感悦ありて神妙の志あり我元より四海乃乱を
 切静め天下統一統安泰ありしめんことを本意とを私乃
 病意遺恨をたそふ違ふし其方かどハ弓箭取て功者
 ありゆやく前非を改めて後忠を致とせし決
 て疎畧をびと宣ひ直小岩成を解ゆるされたりその
 時木下藤吉郎ひそ小信長の御側小伺公一岩成を助
 けまこと然るべくらびたとい虎を林小まめら鱈を淵
 小しと小似たり當座の難を遁まんとめ又言葉を巧
 小しく御意小入ゆそのふたべ一實く御旗本小ありて

武功を多しむべきものはいりて今度淀の籠城公方
家の御頼小るといふその内實はのちぎまは先亡
の余類をあらめかへつて自己の本意を達せんと企て
一もの小てはされ共我君高運小まは備を八却て岩成
生捕とありてはその上岩成りやせし辞はめは已ら
勇氣をけりて生捕の耻を多しとせし殿を表裏の方
とそりて奉り後小鷹馬と侍いつういてふらると云
これに必定ともめくもして命たをわううさねて軍を
起し會稽の耻を雪めんとおそひ付しそのふるふ
早く誅せらるる後日の患をなとてあつとあるうと
と進め奉りしかとも信長いさごさとりあをひあ

の勇士をやとくと殺させんといふも残り多しと
おそいさし左もあるけまとも此方あて重恩を施
さいそま小感とて誠忠を尽まはるる思召
をさるるふして御覽あらんと宜ひく承引あしあは
ぬい秀吉もかまねて中しき詞かくいつうこれを防ぐべ
き時節もあらんとまつそのまに助命さまふり

荒木村重高槻城責の事

并中川瀬兵衛和田惟政を討事

和田伊賀守惟政は公方家隨一のもの小て専軍事を差略
るし御和睦の乃らし所勞ありとて摂州高槻乃城
小籠居して出仕もきりりるを槇島へ籠城すはし

ける頃専使と申つて召出さし一かともあまりに御軽く
の御謀りかして参上さしあがりから年来隨ひ奉り
御馬も浅らぬ御合戦難義不及せられん時
後詰まるとおとひ居たりし織田勢槇の島へ寄る
やいかさかじき一軍もあつて將軍御退去ありしと聞
伊賀守大又力とてありあり小云甲斐ふき御振舞う
かさろふても信長う威勢日の升るがごとく月の恒り
とハゆるさまとやべき今日昨日小なりつとバ此人
あつて天下の武士の棟梁とあるべしさて、我身乃上
りりりとおとひゆるふり高槻の城は要害をか
まへ防戦の用意しと待ける由と信長聞召摂州乃事

ハ荒木村重りや請一處より別の御使小及バ村重り
計らひとて惟政と討取べしと仰出られしハ村重
大小悦びとてやう御請やてやぐて軍の評義とふ
けるが荒木と和田との年比宿意あつてたがひは不
快の中であり村重幸の時節うかいふもして惟政
を討て遺恨とをりさやとホもとも和田ハ聞ある
大かふり等閑の武士小ありあがり小軽く一侮
らハ必定仕損むべし如何おもしと城外へホびき出
謀てこそとて取べし面く油断なくかきとべしとぞ
下知し

香川某が記すハ和田惟政茨木の佐渡守池田の八郎三

郎と討んことを謀る池田和田が首を取たらんぬのよ、
 吳羽の臺と與ふべしといふ札を立たり時又中川瀬
 兵衛清秀ハその札を懐中し某和田を討べしと云
 て和田が出るとまつ和田が郎等高利兵大夫今日乃
 軍と止めしに惟政まきうび強て戦ふ高利あまよ死
 と白猪某和田小鎗を付しと中川はり来りてこそ
 を奪ひ首を取しといふ又和田系圖ハ此時芥川城
 小籠り村重と戦ひ度々勝利を得しは糠塚合戦よ
 討負戦死せしといふ時小年四十二
 村重が甥小中川瀬兵衛清秀といふものあり大膽不敵
 の勇士ふりけるが御心安くれ明日の軍は急度伊賀守と

討取もべしとぞ請合しき側より左ふいとれを軍の
 勝負の時の運ふりうそのふまばりぬえ何とぞ定え
 らるべき御邊勇氣小やうと心易く思ひまへども和
 田もさうそのあり勿くたやましく御邊小討るべきやと
 いハ清秀口論ハ無益あり志をうつく明るを待まるとぞ
 取あひに
 中川瀬兵衛清秀ハ天文十年辛酉山城國に生る今年
 三十三歳荒木村重小長とて六歳あり清秀乃父
 を秩父下野守といふ下野守の父を佐渡守重治といふ
 攝津國源氏多田の庶流中川左衛門尉某の壻たり因
 之清秀丑年の次男といふを以て中川を冒せしものよ

村重八百餘騎にて高槻表へお寄馬塚又陣をとる和田許へ使節を以てやりしり撰津國の事村重織田殿より拜領したる今日より某當國の守護職ありいづとも某り許へ来集して差圖を請らる小伊賀守籠城して合戦の用意をふし争乱の端を引起さること近頃以て不當あり早く某り陣頭へ参らる下知を受るいとぞいそせける惟政聞て使者小向ひ將軍より撰津十三郡の守護をい惟政よりあひつるなり然るを信長より村重を以て當國の守護とせしとるやそれば信長の私の計ひあり撰島をい御退去ありとを將軍いまごせよやいあせへ將軍より惟政が守護を召返さ

て乃ら村重小賜をらんい理ふととも惟政いあご守護を辭しやさび一國ふ二人の守護といふとやある惟政は將軍の御下知をうとを聞め村重う下知を何とて聞べきとと立歸りいそせ使をういのくいと村重さだめと寄来らんむるを早合戦の用意をよとて和田り手勢をととつて三百餘騎糟塚といふ處に備を立て敵をまの荒木が使ををいり和田り返辭をそのまたあねひて落ふくやい村重聞てさもことを云めた今日軍の味方の勝利といふいふその故は敵を糟塚に陣を取味方の陣に馬塚糟に馬を喰ふといふつともよく進く敵の糟を喰ふといふさめつまい

いづれも勇をかりてけり惟政既ニ糟塚まで軍兵を
操出—三百余騎を左右ニ列ね眞先けり戦といと
む荒木が手の者和田を見くいと討取中川ニ鼻あ
くをんとそ振舞けりさきども和田の名ニおみ勇士あ
當るどさいまい切て落—前ニ拂ひ後ニ難立戦あわ
小荒木が兵士切立られ蜘蛛の子の散ごとく四方へまつと逃
たり—かゝ惟政らにも嬉しげに打笑ひ扇ひらいて風
をまぬき云甲斐もかき者ともるか荒木ハ何處かあ
るやらん擇々打ふるつべきものごとく氣色よくげと
息繼居たりける處—中川瀬兵衛清秀と名乗背中小さ
したる指もの又和田伊賀守とやら取と大文字ニ記

—たりとまを見るその傍若無人の振舞うかといを
ぬそのころあうりけり然る小清秀とそと近しき和
田を目がけて鎗を突出せり和田大太刀を打振けり
むよとまとも和田ハ數刻の戦ひは氣つくり勢くド
りく請太刀小刀とあうりけるを清秀わと込く突く
—は和田ついに打まけ手負けるを得たりと清秀
おどろのつまく引組たり双方おとらぬ勇士と勇士
鎧をつりくわきけり踏をび—西馬のあひへと
と落惟政清秀を取て押え首をのんとあ—ける時清
秀下り小刀を以て和田が脇をらと二刀ばらとさ
けりふとさ—その惟政神心つりれとさ—押え—手

乃のうらうらける處をうらふ之に終は首を取く太刀乃
鉾子貫き立上り大音聲ふきの年ごころ鬼神とよば
まし和田伊賀守と中川瀬兵衛清秀ごころ取たるを
らとを見らやとさしあげ四方をふらんぐ立けま
ば和田三百余騎主とらときてめあそと散くは逃
たり一かは清秀静く村重陣引返しとさか
實檢入りくは荒木大は感賞しやうて高槻へ寄
けまども城の大將うとさし上り誰うけりく戦
ひといどもあんいづともく降を請との日の命とたか
まけまの村重難なく高槻と乗取事のしと注進を
し小信長あつく賞をらま猶池田筑後守伊丹兵庫頭

二人を討取べしと下知ありけりまらり村重伊丹より
しとせやぐて責落しそまらり池田小むひしかは
筑後守さまぐ小怠状奉り侘言やとさしかとも信長
ゆりあそねは高野山ふりり出家したりけるま
らり摂州忽は平均し村重が威勢破竹乃ごころありけ
まの石山本願寺押えのこめま在國しと一揆とあそく
合戦とらまどもかひぐしき軍はるりけり

重修眞書太閤記四篇卷之廿三 終

重修真書太閤記四篇卷之廿四

安養寺三郎左衛門尉古郷小閑居の事

并秀吉再度日野根兄弟を謀る事

織田信長大軍を率一榎島小押寄一木下が奇計
 小より將軍家楨の島を退去より一海して合戦及む
 以信長終に京都入る所司代を置江州小入高島郡
 を征伐一淀の城を木下細川又責落させ摂州高槻
 池田伊丹を荒木村重責を責とむいけり和田伊賀
 守を討死一池田筑後守高野山よりなり攝州一國平
 均一けしは再度信長上洛ありて元龜乃年号然るを

くらび改元あるべき由奏問ありけり七月廿八日
天正と改めり

織田殿京の地子錢免許の事と考ふる定京中地子
錢永代令赦免畢若從公家寺社方地子錢ノ内収納
有来ル分者相計替地ヲ以可致沙汰事一諸役免
許の事一鰥寡孤獨之者見計扶持方可令下行事
一天下一號ヲ取者何ノ道ニテモ大切ナル事ナリ但京
中諸名人トシテ内評議有て可相定事一儒道之學
小心ヲ碎キ國家ヲ正サント深ク心ヲ勵ス者或忠孝烈之
者尤大切ナルコト余条下行等子他異ニ可相計之其器
之廣狹能尋問可告知之事右條々相計可申付者也元

龜四年七月七日信長村井長門守と云文書あり

八月四日岐阜へ歸城まほしけり小淺井長政今春より
公方家の御頼と幸甲州の武田勢州の前の國司北畠不
知齋と牒し合を信長と狭く討ふると謀りける
小武田信玄へ軍中小傷いて物故し將軍家楨の島を退
去まほしけり小より淺井家の領知敵地小接近を
し故岐阜の兵を受んこと遠くしと左あゝい滅亡乃
期近き小ありと推量し所縁を求めて降参する者
とあづる多し山本山の城主阿閉淡路守安養寺三郎
左衛門尉兩人久政長政よりやく織田家と和睦ふしむ
へし諫めし共久政ととときらげ然る軍の談議及

びける時をましく良策とぞむむととも久政まことこれ
 を拒みて用ひむと三郎左衛門尉の浅井の運めとむきと
 是の如何小助言さるとも立直とべき時はあつてその
 上小遠藤喜右衛門尉討死したて誰と語り誰と共
 小計るべきまこと何の頼もあらず當城は居る浅井の家
 の亡びんとせん憂懼ともうてささけりあつてや
 久政長政共戦死せんこと一珍しけれ然れ誰り亮政
 以降累代の幽魂を弔う久政長政の冥福を修むべきと
 思案し病あつて云く山木村の城を出故郷ありけり
 安養寺村へ歸り遁世の体あく居たりけり信長とこ
 一食ちきり小召としかとも参らひるるは二年と經て

京極高次の家とぞまこと一時機又招りしは浅井
 は京極の家臣あり京極は江北の本主ありそのいのち
 んこととさのこ否むべきことかいはり三郎左衛
 門の浅井小仕え一名ありとて髪そりこがら安養寺
 門齋と稱して出たりけり楮も山木山の城へ安養寺
 退散とせしめりて八木左京亮と籠熊谷忠兵衛
 今村掃部同十郎兵衛等をドめれとて加勢して相
 備とある然る小阿閉淡路守のあてより木下藤吉郎
 小属織田家へ志を寄たりけり今度公方家榎島
 を退去ましくけるのら信長京都の仕置を改められ
 江州所々の城と攻落さしと見ていよく織田家合

休乃心を定め浅井より加勢のため小とて籠られ
八木熊谷今村が輩と追出しけりて敵の色をわら
りけりて雲雀山は籠りて浅見大學も降参を此由
小谷へ聞えりかの長政大又怒り急ぎ山本山へ押らせ踏
つぶささしとやささしかとも家老たらいづとも大
事の前の小事ありと制しける故長政無念をあら
へ居らさける小日頃浅井家又来り浪人分ふかくかく
よつと居ける日根野備中守同弥次右衛門尉兄弟無双
乃勇士形もといと長政一方の頼もふおもひれりかま
れも織田家へ馳加えりけるその次第を聞小先達て木
下藤吉郎竹中半兵衛尉と謀りて日根野兄弟より利

解を説く其心を動かし浅井家の扶助を受させ且
浅井の爲は働らうげう様あかしくそのらあさ反間の
奇謀を以て終り日根野兄弟と織田家小降らしむある
時木下腹心の兵士と擇ひ賣人の体小作り立日根野兄
弟の宿所入込を朝夕心を付させしに長政より日根
野の許へ浅井七郎といふもの来るを見くそのら能
く聞糺をい日根野が次をい浅井七郎承るるう
とさぐり出し浅井七郎が家小も物賣にゆさ日と經
ける小従ひいのか心易くありまじりある時日根野
は頼もまこと濃州へ飛脚小ゆく小より四五日来るま
といふ浅井濃州は何處まで行どと問岐阜まで行と

答ふ岐阜ハ誰許へ行ぞと問氏家安藤の許へと云浅井
七郎あれと聞此頃日根野兄弟長政の扶助を返すの
軍あも從ふと不審とおをひの借ハ織田家に志
と通どると見へたりたの小探り知やとおをひけ
る小らうある時彼賣人の来り一時先頃日根野兄弟の
こめ小美濃小使しり由語りしがそのあらは行ざり
かと問えんゆそのあらはと参りやさびゆう今廿日ば
りの内小まさ頼むべきやとさきと云ふ浅井その
方美濃へ飛脚はゆ時我も幸便を頼むた頼まぬ
つべきや否といふ岐阜はゆそのことゆふ頼まると答
ふ浅井はゆふら岐阜の町の小刀とあつらふとて約束日

又件の賣人歸り来てゆふの荷の内小御詔の小刀も入
置たりあまう小けりて小さき包一ツ途中はとれ
立かへり取て参りやべその間あは置と給といひ
捨外へけり出たり浅井はき隙ととおをひその荷を
開きらうといふも小刀もあり又氏家安藤稲葉ふど
の許らう日根野兄弟小贈る書簡もあり取てひそ
るこまを披く小その事さして何とも定めぬといふ
も正しく音信と通ト親しくとることハ相違ぬと聞
えたり浅井その文と一通とりかく去氣ふき休ませ
待つおをひ飛脚けり歸り取落きそののを携え来
り件乃荷らう小刀を出して浅井小まさ日根野

病所とさして出行ぬこまじく浅井あやしくおまひ
 長政又あめごとと告たりしかい長政もかひく件の日根
 野兄弟のあまひあやしくおまひ居たる所をまびあ
 れを疑ひおろもわらびこまを誅して後の患をまらひ
 をやと内々浅井七郎小示合さまじくがいこしてを
 れたりげん日根野がかとへ知れまび日根野兄弟用心
 て晝夜油断をびろ折もつか當地と立退をやと思案
 しける越前の國小ある齋藤龍興身持よりからび
 淫酒小精神とうをくれ本國へ歸るべき所存もるき由
 と聞度書翰を送りあれを諫めしかども更聞入る
 氣色もあかましくかひ今いもや齋藤の家の再興おも

ひもよりび果して竹中のヤキ言葉の理よあた
 ることおもあまいも我身の行末さだめかぬく心
 と痛ましむる処浅井方の侍中より合く日根野兄弟
 織田家は親と厚くありあるがら當方は食客居ハ必定
 木下藤吉郎がけりる処小して當方の虚實を探り知
 べき鳥とあつるあど語り合けるまじく長政もいひ
 くれを聞左様のことをいもあまきや當方小あり
 ねくららるめい受ける扶助をくし出陣の度又従ひ
 相應小かをぎしとのが此頃ハ更戰場へ供をびさるれ
 い味方の侍の織田方へ志を通むる手引をるまとおおえ
 たり獅子身中の虫といこれあるべしいり小もして人

まは彼兄弟と打ち捨るやと思慮とめづつと
も將軍家旗島小御座ある内信長の勢野あも山も
うちくたまはいうる急變あらんも計らまど浅井
が方小ても用心せしといふとたしか小虎御前山も聞
えしか木下あろへ竹中と呼寄謀とさづける小頃を
八月五日の夜木下組の兵士と勝り三十余人下小具
足とろろいせ浅井七郎が手の者の印と付上ま、蓑笠を
着を懐中し鉄炮小筒短刀とかくし持をよく謀と
中合め別まよと是まで間者として入込を置たる賣
人と今度い魚賣小して日根野が宅へ遣る魚乃價を
いやしくして賣をしろまろ日根野も心をわくば徒然

のあまり呼入る様との雑談とるしつつか今宵日根野
乃病所はいたる私在所の百姓共多く軍役小あたり浅
井七郎殿の手あつわく召遣るれゆり只今大勢一緒は
百姓乃姿よて出来りゆ故もや役明て歸るかと尋
ゆはいや役明所くる一しか今より命づけの役目を蒙
り是非も役場へ赴くおろとや何様のとらる
そと尋ゆへ日根野殿兄弟と密に打殺せとのこと
首尾よく殺し課をあげば一廉の褒美とあるらんとの
ららあまも日根野殿とやら浪人あろ歴々の武士
かり我等の分りも勿く叶ふべしとわもそねども先
如何なる容子よと遠くかがら伺ひ見んとく出行ゆ

と申す此方様は日頃御るごとく厚くゆを以て御知
せし何ぞ御覺ありや御用心ゆく御立向ひは百姓
姓のともおろ何の御造作もあらずとゆども跡は
て御面倒るべしとゆども御退ひてゆと告げる
より日根野兄弟の驚きくる怒りこの比さぬの
取沙汰ありつても定くあることもふけはば左様乃
こゝに知ざり記されども侍を撃んとゆわ侍を向
く尋常は勝負とまき百姓原を差向て亂妨させん
と企ゆる条臆病の仕方ありと怒りけるを件の賣人
様たゞ百姓原がまゝと小御兄弟の逃むひといえ
まゝも口惜めし一實は恐怖云甲斐なき百姓共に

御門乃内へ引入く生捕て事の實否を尋ねさせむ
明白小分りゆべしと勧めけし日根野兄弟何様百姓
もぎや打手の向と聞てそのまゝ逃るも耻辱あり其方云
ごくこの処はまら付て一人も残さば切捨んをゆ
兄弟伯叔十五六人手ぐとね引て待りけり

浅井七郎日根野兄弟小討事
并日根野兄弟虎御前山入事

木下が兵士等百姓の出立ちより三十餘人日根野が病所
へ走り来りて告げら近隣の百姓とも大勢何とハ不知
此方の御内をさして参り御用心あるべしと申すは兼
く待らふりてこと小てハあり日根野備中守同弥次右

衛門尉門の左右又かくは居て一人門を開き百姓原と
呼入手早く門をさし固め有無をいふはかきさしうり
蹴倒し投付一人も残らば搦取けよば彼等の共大に驚
きあはくゆりしむて泣きひひけつと日根野弥次右
衛門尉一懐中を改めけつ小或は小筒の鉄炮ありひ短
刀をかくし持たう上着をぬぎきて見る小兵士の姿
て浅井七郎が手の者と云印を付たり是は於て日根
野兄弟彼三十余人のものを共を引と急何とて我を害
せんと謀りけりやその次第を明白ふかば命を助
け返さべしと拷問せし彼等の共口をそと我の浅
井七郎の士卒よてゆへとも何の故とやことは存せぬ小

谷らうありて御兄弟を生置ては味方の患かりとやく
殺害しゆと下知せりさかくの如く姿をやしし不意
小入込ゆとの下知よてゆささどもかく顯をれゆ上ハ
命げり御助下さるべしと歎きけり小を備中守様
浅井七郎何故は不来やと尋けしは七郎殿の病所はあ
りて我ら注進次第駈行べしとの定あり浪人の入
と討は七郎が自身罷り向ふも翹こしあづ汝等が力
よて首を取て来るべし手おあまらへ注進をよとれと
おてゆとやけしは日根野兄弟まじく怒り我等を侮ふ
こと法は過たり然ハ七郎をおびまさうせ首切くよとん
そのまとのしけしは件の百姓原私共ハ木の木の百姓

小ていづ夫役小取まゝ無体よかくのどと手役と申付
らまゆと實難法仕何卒まやく在所へ入り面
業と精出しや度ゆそのかまう七郎殿と呼ぶ参り可
申七郎殿御出ゆも私共と御有り御返し下さ
まぐくゆと申しつらう日根野兄弟七郎とま連来り
ふ其方共は用ふし速まかへ遣まひと申し
小うり件の百姓らうり三人と浅井が宿所へま遣ま
ひその時件の三人立歸り七郎殿御出の時分私ども
仲間と軍し御出ふされゆべしさかくて七郎殿早
速に御屋敷へまらうまよまどんと申して飛が如
く小はり行さて彼三人浅井が宿所へま入り私

共は當村の者よてゆり今夜日根野兄弟晩方小あり村
中百姓の家へ押入浅井七郎殿の差圖ありと理不盡し
金銀を取集めらまゆも拒まて出し不申まのどと
打倒し蹴顛しるどいさまゆめり百姓共三十人は
かうよて日根野と追掛只今日根野の宿所へ付入戦ひ最
中よ何卒御出ゆて御取鎮め下さまゆへかんと歎ま
つ訴へけま浅井七郎大不驚まさて日根野兄弟當
地と立退とおなへたり路用のため百姓の宝と奪ひ
とおもつる悪き仕方がいて掛付て取かへ得ま
べしといふらうまやく鎧と取く肩まかげり手勢
ハ跡らう来れと云まま真一文字又駈付まれ日根野

大開日記編卷之廿四

兄弟百姓原と追ひつゝ戦ひ居たり浅井七郎と
 へ御さんかま日根野兄弟遁まほと突てのどど々
 忽かの百姓ども日根野とよとて浅井又切くる浅井も
 何故ぞといへどもまきうげ手あげく切つ突つあつま
 しまり七郎も合點ゆるぬど百姓原は向ひまづ打
 合突合りり処へ日根野兄弟臆病未練の浅井七郎我くと
 闇討よさんと謀りしもの拙くも又おろしし我等
 が手柄いか袖くも知つらんまやまると地下入共りつと
 るべこそもの積りし汝がおろめさふといわう早く
 左右より操出と鎗の電光石火あまたざひまもあつた
 とい浅井心の猛くとも終は兄弟の鎗と受損ト高股

つかましく馬より落ると起しも立ど切あを首を取て
 立あがる浅井が手の者追まうて付まれば浅井ハ討
 死し馬のうらまえて駈めぐるいうふきやと見るつら
 小日根野兄弟切て出まげく責立けるふより立あ
 しもなく切ましく跡も見ど逃散たり日根野は
 逃ると追まてふして兄弟主従ら集りあくしとホ
 ろふ浅井とい打取たりさりととも此終あていふも濟ト
 小谷より定て討手向ふべし去とく夫等を引受討死
 きんも無益ありべしさらば一まひ當所を退去し何處小
 う身を寄るといふまゝ小家小火をうけ立あがるを件
 の三人何様御立のき然るべくい去ハ御案内仕らんとして

先小立丁野山乃麓より愛知川を心ざり行なやと馳
けり云雀山と虎御前山の交りて甲冑の武士五六十
入りやと出来つて路をさへぎる日根野兄弟のりくと
打笑ひ只今浅井七郎と一打小打切く立退るるを
其方達の分際にて遮り止めんと出向ふ心の底へ猛け
とどあたら命よかけ替もあらずと罷退と呼い
れは彼者ども日根野兄弟のりば猶更通とあどきを
と追取まき一人もあまゆいと切てぬる日根野兄弟も
今いづれぬ処あり尋常は軍して討死せんとせ
又立向ふ処へ虎御前山の方より百騎のり武
来り日根野を止めんとせし五六十人の兵士と突立

追散と彼五六十人の兵士等立足をどろり逃らうたり
その時大將とおぼしき侍馬の上小て立あかり松明を
てら日根野兄弟を見付あいうは備中守弥次右衛
門尉何とて夜中小此邊を徘徊しつ只今の休あをわ
やしけといふ竹中半兵衛重治のり日根野兄弟の
だひ驚き浅井七郎と打果し住かまし一在所を立退
んとせしに浅井の勢は追りけらるる既小合戦は及ん
とき一処あるはおとひの外御邊小救をせしとあ不
思議さよとのこれ重治らうなづき是までの成行
の問も益ありさて何處へ行あべき夜もあけたる
その上より火急のりから立退べき先途も心もとかり

るべし草鞋の用意もあらずし今宵はまづ某う宅よ
 来て休息あさそのら能く思案して何とへなる
 とも退ふへとよめらる兄弟元より行べき先もか
 く行返をへき家と焼つともめくも計らるゑんと
 て重治小打つと虎御前山の竹中が持口へそ入来る
 あのことよとく木下と竹中とをわたりしことふて浅井
 を聞し日根野と聞し七郎と討と途中の兵士まで
 る是木下が手の者よとあぐ作り立しるまども危急
 乃処あると以て日根野兄弟もやとくとをからま
 けり

重修真書大岡記四篇卷之廿四終

